

## 「米」と農村社会

「米」が、わが国における農産物として極めて重要な地位を占めてきたものであることは言うまでもないが、米を作るための水田の営みが、わが国農村社会に与えてきた影響もまた計り知れない。水田における共同の作業、水利用における相互の調整といった古くからの営みは、村落共同体が有していた相互扶助、相互規制といった機能と深くかかわっているものであろう。

こうしたわが国における村落共同体の在り様は、かつて多くの議論の対象となり、その評価もまた多様であった。日本人の心の故郷として柳田國男が愛惜の念をこめて語ったのも村落共同体であり、丸山真男がわが国封建社会・超国家主義の基底をなし、克服すべきものとして論じたのもまた村落共同体であった。柳田が相互扶助という美しい側面のみを見、丸山が相互規制という否定的な側面のみを見ていたとするのはあまりに単純化しすぎた議論であろうが、村落共同体の有する複雑な性格が、両者の異なる感性に異なる啓示を与えたであろうことは想像に難くない。そもそも、相互扶助をプラス面、相互規制をマイナス面とする議論も単純にすぎよう。相互扶助の内包する「仲間意識」が農村の排他性、閉鎖性につながっていたことは否定できず、一方において、相互規制の意識が、様々な側面で農村におけるモラルの維持に役立ち、農村の生活の場で、また多くの農業政策の遂行面で大きな役割を果たしてきたことも事実であろう。

そうした様々な評価がありつつも、村落共同体がわが国農村の生活を支え、農業政策を支え、そして農協の基盤として農協組織を支えてきたものであることは紛れの無い事実である。村落共同体の「崩壊」が叫ばれるようになって久しいが、わが国農村は、現在に至るまで、そうした農村の基本的な性格をかるうじて維持してきたように思える。しかし、近年の高齢化の急速な進展と、水田経営のあり方の大きな変化は、わが国農村社会に、決定的な変化を迫りつつあるように思えてならない。農業の在り様は、農村社会の在り様と密接な関連を有するものであり、水田政策は、単に産業政策としての意味だけではなく、水田経営の在り様を通じ、農村社会にも深くかかわるものである。自由化・市場化を徹底し、零細農家の退出を強要し、さらには100ha規模の農家を1万戸作ればよし、といった類の近年の農業改革の議論においては、どのような農村社会を展望するのかという視点が決定的に欠けているように思えてならない。

一方、いかにかつてのわが国の農村への郷愁を覚えようとも、それをそのまま現在の社会に復活させることは不可能であり、またそれが望ましい道であるとも思えない。今後の農村は、農業を産業として維持していくという観点から、さらには、より魅力的な社会であるという観点からも、新たな参加者を許容する、より開かれたものとなるべきであろう。農業政策は、そうした多様な主体が参画し、農村を持続的な社会として維持し得るという観点から議論されるべきであろう。また、我々農協系統組織は、自らの基盤であった農村社会の変貌に際し、活力ある、新たな共同体を形成していくための、より積極的な役割が求められているものと思われる。

((株)農林中金総合研究所 取締役基礎研究部長 原 弘平・はらこうへい)